

18世紀英語における接続詞用法の without

THE USE OF WITHOUT AS A CONJUNCTION IN EIGHTEENTH-CENTURY ENGLISH

小松義隆・田島松二

Yoshitaka KOMATSU, Matsuji TAJIMA

キーワード：接続詞用法の without、18世紀英語、ジョンソン博士

Key words : the conjunctive without, Eighteenth-Century English, Dr. Johnson

要 旨

本来副詞や前置詞であった without を、‘unless; if...not’ の意、つまり否定の条件文を導く接続詞として用いるのは古い言い方で、今日では方言もしくは卑俗と考えられているが、初期近代期（1500–1700）には散見される。しかしこの用法に最初に言及した辞書編纂家のジョンソン博士は1775年に刊行した *A Dictionary of the English Language* の中で “Not in use”、つまり「（現在では）使われない」という文言を付している。

小論では、その実情を探るべく、18世紀に刊行された散文、詩、劇、小説、書簡等計21点のテキストを調査し、Dr. Johnson の見解にもかかわらず、接続詞用法の without は Congreve, Richardson, Fielding をはじめとする18世紀前半を代表する作家の作品にはある程度見られるが、後半では極めて稀であることを明らかにした。

Abstract

The use of *without* as a conjunction meaning ‘unless’, which is branded as substandard, dialectal, or even vulgar in Present-day English, was common in the Early Modern English period (1500–1700) but later in the eighteenth century the conjunctive *without* was described by Dr. Johnson in his *Dictionary* (1755) as “not in use”. Based upon an examination of some 20 texts written in the 18th century, this paper demonstrates that, despite Johnson’s view, the conjunctive *without* is still found among the works of such good writers as Congreve, Richardson and Fielding in the first half of the 18th century, although it is extremely rare in its latter half.

I

本来副詞や前置詞であった *without* を、‘unless; if ... not’の意、つまり否定の条件文を導く接続詞として用いるのは古い言い方で、今日では方言もしくは卑俗と考えられている。話し言葉としては残存していても、書く人はほとんどいない。この *without* の接続詞用法はいつ頃起こり、いつ頃まで使われたのか。そしていつ頃から、とりわけ書き言葉では使われなくなったのか、あるいは方言もしくは卑俗とみなされるようになったのか。14世紀の終わり頃に初出、初期近代英語 (Early ModE, 1500–1700) では時折見られるが、時代をくだるにつれて標準英語、とりわけ書き言葉では衰退、やがて消失する接続詞 *without* の詳しい歴史は、残念ながら不詳である。

筆者らの最終目標は接続詞としての *without* の歴史的全貌を明らかにすることであるが、今回はその一端として、当用法が比較的起こる時代と、衰退期の境界に位置すると考えられる18世紀英語に限定して、その100年間に接続詞の *without* が実際にどの程度使われていたかを観察したいと思う。

II

本論に入る前に、*without* の接続詞用法についてこれまで明らかになっている点を整理しておきたい。筆者らが知る限り、この用法を歴史的観点から論じた本格的な研究はないようである。ごく一部の辞書、文法書、語法書に付された短いコメントがあるだけである。

歴史上、最初に接続詞としての *without* に言及したのは、おそらく、18世紀のイギリス文壇の大御所で辞書編纂家のジョンソン博士 (Dr. Samuel Johnson, 1709–84) である。1755年刊の *A Dictionary of the English Language* (s.v. *Without. conjunct.*) において、“Unless; if not; except.” という定義のあとに、“Not in use” (1798年版では “Not in use, except in conversation”)¹⁾、つまり「(現在では)使われない」

という文言を付し、16世紀の詩人 Philip Sidney (1554–86) から2例引用している。(ちなみに、18世紀の規範文法書 Lowth (1762) や Murray (1795) にはこの用法に関する言及は見られない。)

ジョンソン辞典後、1世紀半以上経って刊行された歴史的原理に基づく大辞典 OED (1933, 1989²⁾, s.v. *Without C. conj. 2.*) は、この用法の歴史に関するやや詳しい説明と豊富な用例を提供してくれる。それによると、前置詞 *without* が、目的語として *that* 節を取り、*without that* という接続詞句 (conjunctive phrase) になり²⁾、その *that* が省略されて、*without* が単独で接続詞の機能を果たすようになったものであると説明し、更に次の様に述べている。

Formerly common in literary use, most frequently with verb in subjunctive; later colloq. (‘not in use, except in conversation’ J. 1755) or arch., and now chiefly *illit.*

引用文中 () 内の “J. 1755” は Johnson’s Dictionary (1755) のことであるが、“except in conversation” は1798年版で追加されたもので、1755年刊の初版にはない。この、20世紀初頭の所見である OED の説明は、以前は書きことばでは一般的であったが、後に口語的 (colloquial)、あるいは古風 (archaic) になり、今では主として無学者 (illiterate) の言葉遣いである、というものである。第2版 (1989) ではアメリカ英語の方言でも使われる、と追記している。OED の見解を裏付けるデータは提供されていないが、18世紀中頃に刊行されたジョンソン辞典のコメントに言及していることから、18世紀以降は話しことばでしか使われなくなったと見ているのであろうか。

そもそも接続詞用法の *without* はいつ頃から見られるのか。OED と MED が共に挙げる最初の例は、14世紀の詩人 William Langland の頭韻詩 *Piers Plowman*, C-text に起こるものである。下に示すが、原作や写本の制作年代等に関し

て、その後の研究成果を反映している MED から引用する。冒頭の c1400 は写本の制作年代、() 内の ?a1387 は原作の制作年代を表すので、初出例は14世紀末頃のものということになる。なお、引用例中の下線やボールド体、訳語等は筆者らのものである。(以下、同様)

c1400 (?a1387) *PPLC* (Hnt HM 137) 5.176:
Quath conscience to te king, **whith-oute**
comune help, Hit is ful hard .. þer-to hit to
brynge. (= Said Conscience to the King,
“unless the commons help [mel], It is very
hard ... to bring this about.”³⁾)

OED は上例を初出例として、15世紀の書簡から2例、近代英語 (ModE) 期に入り、16世紀から4例、17世紀から2例、18世紀から2例、19世紀から7例を記録している。もう一つの MED (s.v. *without* conj.) は、接続詞 *without* の意味を (a) ‘unless, if ... not’ と (b) ‘without its being the case that’ の二つに分け、前者については上に引用した *Piers Plowman* の例を初めとして、15世紀から7例、の計8例を、(b) については15世紀の例を1つ記録している。

OED, MED 以外で、歴史的な情報を提供してくれるのは Jespersen と Fowler, それに *Webster’s Dictionary of English Usage* (以下、WNWD) くらいである。Jespersen は *Modern English Grammar*, V (1940) で15世紀末から20世紀初頭に至る著名な文人からの例を9つ挙げているが、時代ごとの用例の多寡にはふれていない。Fowler の *Modern English Usage* (s.v. *without*) は、初版 (1926) と Gowers による改訂第2版 (1965) で、接続詞用法の *without* (= *unless*) を “good old English, but bad modern English—one of the things that many people say, but few write;” と断じている。Burchfield による改訂第3版 (1996) と Butterfield による最新版の第4版 (2015) では、かつては (14–17世紀では) 標準語法であったと述べるが、18世紀

については先の Johnson のコメント (「(現在は)使われない」) にふれているだけであり、その後は英米ともに方言、卑俗な用法として今日に至っていると言う。

WDEU (1989, 1994², s.v. *without*) も、先にふれた Johnson とアメリカの辞書編纂家 Noah Webster (1758–1843) に言及しながら、次のような興味深い説明をしている。‘*unless*’ を意味する *without* の接続詞用法は、かつては完璧に立派な (‘perfectly respectable’) 用法であったが、18世紀までには Johnson が1755年刊の辞書で「(現在では)使われない」(1798年版では「会話以外では使われない」) と特記するほど品 (‘*grace*’) のない語法になっていた。Webster は1828年刊の辞書で、この接続詞としての *without* は “good writers and speakers” の間では *unless* か *except* にほとんど取って代わられているが、一般民衆の会話 (“popular discourse or parlance”) では普通に使われている、と言う。OED の引用例に照らすと Johnson と Webster の見解はやや時期尚早 (“premature”) ではあったが、書き言葉には見られなくなっているという指摘は本質的に正しいと述べている。19世紀後半以降は卑俗あるいは方言的な会話以外、印刷本で目にすることは滅多にないと言う。

20世紀後半以降に刊行された辞書、語法書は、例えば、LDCE (2003) のようにそもそもこの用法自体を取り上げていないものもあるが、取り上げているものの大半は *without* を ‘*unless*’ の意で用いるのは非標準語法、もしくは方言、卑俗などとしている (Bryant (1962), Copperud (1970), Greenbaum & Whitcut (1988), Peters (2004) など、辞書の COD (1951), RHD (1987), NODE (1998), WNWCD (2002) など)。

これまで見てきた先行文献から判断して、近代初期、つまり1700年頃までは、比較的に見られていたようであるが、18世紀からは書き言葉では稀になり、19世紀以降は話しことば以外ではほとんど使われなくなり、そこでも方言や卑俗と考えられるようになったようである。こう見てくると18世

紀が1つの転換期に当たるように思われる。では、その18世紀において接続詞 *without* が実際にどの程度使われているかを見てみよう。

III

前節で見たように、14世紀末に初出し、17世紀頃までは問題ない用法であった接続詞 *without* であるが、Dr. Johnson が18世紀中葉に刊行した辞書で、多少規範的な気持ちをこめてか、「(現在は)使われない」とまで断じるほど、18世紀の文人たちは、この用法を避けたのであろうか。その実情を探るべく、筆者らは18世紀に刊行された散文、詩、劇、小説、書簡等計21点のテキストを調査した。なお、一部については原典テキストを精読し、用例収集にあたったが、大半は機械可読テキスト、いわゆるコーパスを利用した。ただし、その場合も収集例はすべて原典テキストと照合、確認している。その結果は、次に示すとおりである。複数の作品がある作者については列挙するが、それ以外は () 内に示した刊行年代順である。

18世紀前半 (1700-50)

Congreve, <i>The Way of the World</i> (1700)	2
Pope, <i>An Essay on Criticism</i> (1711)	0
_____, <i>An Essay on Man</i> (1733-4)	0
Steele, <i>Letters of Richard Steele</i> (1717-28)	0
Defoe, <i>Robinson Crusoe</i> (1719)	0
_____, <i>Journal of the Plague Year</i> (1722)	0
Swift, <i>Gulliver's Travels</i> (1726)	0
Haywood, Eliza, <i>Philidore and Placentia</i> (1727)	1
Gay, <i>The Beggar's Opera</i> (1728)	0
Richardson, <i>Pamela</i> (1740)	5
Fielding, <i>Joseph Andrews</i> (1742)	1
_____, <i>Tom Jones</i> (1749)	1
Smollett, <i>Roderick Random</i> (1748)	0

18世紀後半 (1750-1800)

Sterne, <i>Tristram Shandy</i> (1760-7)	0
Walpole, <i>The Castle of Otranto</i> (1764)	0
Goldsmith, <i>The Vicar of Wakefield</i> (1766)	0

_____, <i>She Stoops to Conquer</i> (1773)	0
Sheridan, <i>The School for Scandal</i> (1777)	0
Burney, Frances, <i>Evelina</i> (1778)	0
_____, <i>Cecilia</i> (1782)	1
Boswell, <i>Life of Johnson</i> (1791)	0

便宜上18世紀を前半と後半分けて示したが、ほとんどの作品が18世紀を代表するような作品である。前半では、上流社会の男女がくりひろげる社交界の風習を描いた William Congreve(1670-1729) の喜劇 *The Way of the World* (1700) に2例、Eliza Haywood (c.1693-1756) の小説 *Philidore and Placentia* (1727) に1例、Samuel Richardson (1689-1761) の書簡体小説 *Pamela* (1740) に5例、Henry Fielding (1707-54) の小説 *Joseph Andrews* (1742) と Tom Jones (1749) にそれぞれ1例、それに後半の Frances Burney (1752-1840) の小説 *Cecilia* (1782) に1例起こる。近代英語 (ModE, 1500-1900) の用例を比較的多く記録している OED (s.v. *Without* C. conj. 2.) も18世紀に関しては一般的には知られていない作品から僅かに2例、Jespersen (s.v. *MEG*, V [1940], § 21.5.7) も Defoe の *Roxana* から1例しか記録しておらず、筆者らが収集した11例と重複するものはひとつもない。その意味でもこれらの用例そのものが歴史を語る証拠として意味があると考えられるので、以下、すべて引用することにする。

Congreve, *The Way of the World* (1700):

- (1) 'Twere better for him you had not been his confessor in that affair, without you could have kept his counsel closer. (III. 215-7)
- (2) *Millamant*: I could consent to wear 'em, if they would wear alike, but fools never wear out - they are such drap-du-Berry things, without one could give 'em to one's chambermaid after a day or two! (III. 271-4)

Haywood, Eliza, *Philidore and Placentia* (1727):

- (3) 'Tis not enough to say I pity your misfortune without I give you some further proof of the sense I have of it. (p. 207)

Richardson, *Pamela* (1740):

- (4) I was all confounded; and said at last; It does not become your poor Servant to stay in your Presence, Sir, without your Business require'd it; (pp. 22–3)
- (5) And so, as you order'd me to take her Advice, I resolved to tarry to see how things went, without he was to turn me away; (p. 26)
- (6) And if he does come, where is his Promise of not seeing me without I consent to it? (p. 180)
- (7) She will meet with but an indifferent Reception from me, without she comes resolv'd to behave better than she writes. (p. 335)
- (8) Now I think of it, said he, this must not be, neither; for without you'd give her the Hand, in your Chariot, my Wife would be thought your Woman, and that must not be. (p. 431)

Fielding, *Joseph Andrews* (1742):

- (9) Where could I possibly, without I had stole it, acquire such a Treasure? (p. 147)

Fielding, *Tom Jones* (1749):

- (10) and believe me when I assure you I can

never be made completely happy without you generously bestow on me a legal right of calling you mine forever. (p. 721)

Burney, *Cecilia* (1782):

- (11) “ ... but I have no heart for refusal, nor would my sister at this moment be thus distressed, but that I have nothing more to give without I cut down my trees, or sell some farm, since all I was worth, except my landed property, is already gone. ...” (pp. 377–8)

上に挙げた11例が、筆者らがこれまで確認できた18世紀の用例の全てである。ほとんど全てが会話文、もしくは書簡といった口語的文脈に見られる例である。調査した作家16人中5人、21作品中6作品に見られるが、この数字を多いと見るか、少ないとみるかは、意見の分かれるところであろう。18世紀に前後する世紀に関する実証的データが全くないからである。しかし、Congreve, Richardson, Fielding といった当時を代表するような文人たちが5人も使っているという事実に、先にふれた Jespersen が記録する Defoe も加えて考えると、17世紀以前ほどではなくても、18世紀、特に前半まではある程度見られると言えるのではないか。18世紀中葉に刊行された辞書に記されたジョンソン博士の「(現在では)使われない」という見解は、WDEU (1989, 1994²) も指摘するように、やはり時期尚早と言えるかも知れないが、18世紀後半における生起状況を考えると、当時の書き手、文人たちに、博士の影響がなかったとは言えないかもしれない。興味深い点ではあるが、更なる調査が必要なところである。

IV

以上、14世紀末に初出、17世紀頃まではそれなりに用いられていたが、その後、とりわけ書きことばで衰退、今日では古語、方言、卑俗と考えられている接続詞用法の without を取り上げ、18

世紀において実際にどの程度使われているかを観察した。

18世紀を代表するような作家、作品を中心に、20点余を調査したが、結果は前半の作品には散見されるが、後半になるとほとんど見られない。しかし使用しているのは Congreve, Richardson, Fielding といった、当時でも人気のあった作家たちである。18世紀以前に関する実証的な先行研究がないので、確実なことは言えないが、ある程度残存してはいるものの、その一方で、衰退傾向にあったことは間違いないところであろう。18世紀後半の生起状況はそれを裏づけるものであり、19世紀以降著名な作家、詩人等の作品に散見されることはあっても、古語や方言、あるいは卑俗と見なされるに至った今日の見方を予期させるものである。*

参考文献

第一次資料：

- Boswell, James, *The Life of Johnson* (1791), ed. R. W. Chapman. (The Oxford Standard Authors.) Oxford: Oxford University Press, 1970.
- Burney, Frances, *Evelina: Or, the History of a Young Lady's Entrance into the World* (1778), ed. Edward A. Bloom. (Oxford World's Classics.) Oxford: Oxford University Press, 2002.
- _____, *Cecilia, or, Memories of an Heiress* (1782), ed. Peter Sabor and Margaret Anne Doody. (Oxford World's Classics.) Oxford: Oxford University Press, 1988,1999.
- Congreve, William, *The Way of the World* (1700), in *The Way of the World and Other Plays*, ed. Eric S. Rump. (Penguins Classics.) London: Penguin Books, 2006, pp. 317-410.
- Defoe, Daniel, *The Life and Adventures of Robinson Crusoe* (1719). (Everyman's Library, 59.) London: J. M. Dent & Sons, 1906.
- _____, *A Journal of the Plague Year*, ed. Louis Landa (1722). (Oxford World's Classics.) Oxford: Oxford University Press, 1998.
- Fielding, Henry, *The History of the Adventures of Joseph Andrews and His Friend Mr. Abraham Adams*. (PenguinClassics.) Harmondsworth: Penguin Books, 1977.
- _____, *The History of Tom Jones. a Foundling* (1749), ed. John Bender and Simon Stern. (Oxford World's Classics.) Oxford: Oxford University Press, 1996.
- Gay, John, *The Beggar's Opera* (1728), ed. Edgar V. Roberts. London: Edward Arnold, 1969.
- Goldsmith, Oliver, *The Vicar of Wakefield* (1766), ed. Arthur Friedman. (Oxford World's Classics.) Oxford: Oxford University Press, 1999.
- _____, *She Stoops to Conquer* (1773), ed. Nigel Wood. (Oxford World's Classics.) Oxford: Oxford University Press, 2007.
- Haywood, Eliza, *Philidore and Placentia; or, L'Amour trop Delicat* (1727), in *Four before Richardson: Selected English Novels, 1720-1727*, ed. By William H. McBurney. Lincoln, NB: University of Nebraska Press, 1978, pp. 153-231.
- Pope, Alexander, *An Essay on Criticism* (1711), ed. Stanley Appelbaum. (Dover Thrift Edition.) New York: Dover Publications, 1994.
- _____, *An Essay on Man* (1733-4), Stanley Appelbaum. (Dover Thrift Edition.) New York: Dover Publications, 1994.
- Richardson, Samuel, *Pamela, or Virtue Rewarded*, ed. Thomas Keymer and Alice Wakely. (Oxford World's Classics.) Oxford: OUP, 2001.

- Sheridan, Richard B., *The School for Scandal* (1777). (Everyman's Library, 95.) London: J. M. Dent & Sons, 1906.
- Smollett, Tobias, *The Adventures of Roderick Random*, ed. Paul-Gabriel Boucé. (Oxford World's Classics.) Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Steele, Richard, *The Letters of Richard Steele* (1717-1728), selected and collated with the original mss. with an introduction by R. Bimley Johnson. London: John Lane, 1927.
- Sterne, Laurence, *The Life and Opinions of Tristram Shandy* (1760-7), (Everyman's Library, 617.) London: J. M. Dent & Sons, 1912.
- Swift, Jonathan, *Gulliver's Travels* (1726). (Everyman's Library, 60.) London: J. M. Dent & Sons, 1906.
- Walpole, Horace, *The Castle of Otranto* (1765), ed. Andrew Wright. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1963.
- 第二次資料：
- Bryant, Margaret M. 1962. *Current American Usage*. New York: Funk & Wagnalls.
- COD = *The Concise Oxford Dictionary*, 4th ed. (1951). Oxford: Clarendon Press.
- Copperud, Roy H. 1970. *American Usage: The Consensus*. New York: Van Nostrand Reinhold.
- Greenbaum, S. and J. Whitcut. 1988. *Longman Guide to English Usage*. Harlow, Essex: Longman.
- Johnson, Samuel. 1755. *A Dictionary of the English Language*, 2 vols. London; repr., Tokyo: Yushodo, 1983.,
- LDCE = *Longman Dictionary of Contemporary English*, 6th ed. London: Longman, 2014.
- Lowth, Robert. 1769 (1762¹). *A Short Introduction to English Grammar with Critical Notes*. <英語文献翻刻シリーズ第13巻> 南雲堂, 1968.
- MED = *Middle English Dictionary*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press, 1952-2001, Murray, Lindley. 1806 (1795¹). *English Grammar, adapted to the different classes of learners*. <英語文献翻刻シリーズ第19巻> 南雲堂, 1968.
- NODE = *The New Oxford Dictionary of English*. Oxford: Clarendon Press, 1998.
- OED = *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press, 1933, 1989².
- Peters, Pam. 2004. *The Cambridge Guide to English Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- RHD = *The Random House Dictionary of the English Language*, 2nd ed. New York: Random House, 1987.
- WDEU = *Webster's Dictionary of English Usage*. Springfield, MA: Merriam-Webster, 1989.
- Webster, Noah. 1828. *An American Dictionary of the English Language*. New York; repr. New York: Johnson Reprint Corporation, 1970.
- WNWCD = *Webster's New World College Dictionary*. 4th ed. Cleveland, OH: Wiley Publishing, 2002.
- 1) ジョンソンの死後刊行された1798年版に見られる追記 (“except in conversation”) は、WDEU (1989) の引用に拠るもので、筆者らは未見である。
- 2) この that を伴った without that 構造が ‘unless’ の意で使われる用法についても、OED (s.v. *Without* C. conj. 1. c.) は15世紀半ばの例2、16世紀前半の例1、の計3例記録しているが、現在は廃用としている。MED (s.v. *withouten* prep. 11) は、この without を前置詞と取り、(a) except that, (b) unless, (c) in addition to the fact that, (d) law. even

were it substantiated that といった種々の意味をあらわす接続詞句 (conjunctive phrases) としている。(a) ‘except that’ の意の初出例は1200年頃 (*Ormulum*) のものであるが、(b) ‘unless’ の意の初出例は1432年の遺言書に起こるもので、それを含め15世紀から計6例を記録している。OED の最後の例から判断して、16世紀のどこかで廃用に帰したのであろうか。

3) *Piers Plowman*, B-text では当該箇所は “but the commune wil assent ...” (= unless the commons will assent) と、without ではなくて、but が使われている。

* 本稿作成にあたっては、研究文献の借用等で鹿児島大学准教授の末松信子氏にお世話になった。お礼を申し上げる。